総評　２０２４年１１月分　杉本真維子

「もし宝箱びっくり箱／もしかしたら箱」中矢　温（東京都）

何でしょう。面白いです。別々の箱とも、同じ箱ともいえそうです。入れ子状の箱もイメージされました。

「もう生まれ変われないほど／擦り切れたたましいを見せて／驚かせたい」小川いなせ（茨城県）

たしかに驚かされました。迫力があります。力を出しきることのすがすがしさはひじょうに尊いものです。

「失えば記憶のなかでその人の／心にもない美点が光る」辻村陽翔（北海道）

「心にもない」の「心」は語り手のものなのか、「その人」のものなのか。何度か読むうちにわからなくなりますが、そのうち、「美点」が「光」りはじめ、光だけが残ります。そのように書かれているのだと思います。

「膣口縫合の慣習を持たない俺達の／ひらがなにしては尖鋭な明朝体だ」大嶋　碧月（兵庫県）

「俺達」という人称がどきりとさせます。そこから状況が見えてきます。真のフラットへと言葉が向かっています。

「町へ行く／町から遠い人たちは／町の人より早く目覚める」和泉次郎（新潟県）

遠心力と求心力がつりあうような美しさがあります。あらゆる理想がここにある、という感じがします。

「辛くないことが辛くて馬光る」小里京子（北海道）

観念的な馬に見えて、じつは現実の馬かもしれない、となぜか思いました。辛さとは光るものかもしれないのです。

「冬の野の光で優しい父を編む」ほしはかせ（群馬県）

毛糸と毛糸のあいだにふっくらとしたものが呼び込まれていきます。愛情のようなものかもしれません。

「自販機で／ゴトッと転げる／夢の骨」流転六十（北海道）

誰もが知っているのに無名だった、自動販売機のあのにぶい音に、はじめて名がつけられました。

「雨を踏む鳥のつまさき説き明かし」池田　彩乃（青森県）

鳥のつまさきという細部から、ひとすじの雨の直径へ。ふだんはまずイメージから外れているものが、視界にはいってくるところが新鮮です。

「戦争がきもちわるくて歯を磨く」

沼谷香澄（千葉県）

画期的な「きもちわるくて」の使い方が、戦争のなかにも日常があることを教えます。戦争がなぜだめなのかを説得します。

「君の頬のばしてみればよくのびる／そのままちぎる　婚姻届」

桃井　肌子（新潟県）

ほほが餅のようにのばされ、きられて、いちまいの紙に変わる。その推移がスローモーションで語られ、面白いです。ユーモアのなかに、親しさのおきてのようなものが潜んでいます。

次回も楽しみにお待ちしています！